

日本語の漢語の書き換えと中国語

朱 京偉

要 旨

在研究日语汉字词时,经常会遇到判断某个词是“中国造”。还是“日本造”的问题。这时要注意,日语中有一部分词,从现在的词形看和汉语不相通,但词的前身却是地道的“中国造”。原因在于这些词经过了「書き換え」,词形发生了变化。本文将就此问题做一些探讨。

1 漢語「書き換え」の歩み

1923 年,漢字制限を呼び掛ける主要新聞社の要望に応える形で,当時の臨時国語調査会が漢字 1960 字を収めた「常用漢字表」を公表した。この漢字表では,第一条に「本表にない漢字は仮名で書く」と掲げたように,漢字の字種をきびしく制限する方針を打ち出した。漢字制限の動きが漢語整理の引き金となり,その後,臨時国語調査会は 1926~28 年の間,「漢語整理案」を 13 回にわたって官報に発表した。この「漢語整理案 1~13」でとりあげられた漢語の全 846 語のうち,「書き換え」に属するものは 101 語ほど見られた。これは「書き換え」の始まりとなった。しかし,まもなく人々の注意力が戦争に奪われ,漢語整理の実施は戦後になってからのことであった。

1954 年に,文部省編『学術用語集』の刊行が始まった。この中で「当用漢字表」(1946)以外の漢字が使われている学術用語について,個別的に「書き換え」の方法をとりいれた場合があった。また,同じ年に,「法令用語改正要領」が内閣法制局によって提出されたが,このうち,「書き換え」のものは 50 余語含まれている。

つづいて,1956 年に,国語審議会は「同音の漢字による書きかえ」という報告をまとめて公表した。これは「書き換え」問題に関する最も重要な公式文書で,「書き換え」の言い方も,ここに初めて使われるようになった。この文書は先行する学術用語や法令用語の「書き換え」の用例を吸収して,さらに新案を追加する形を取っている。「書き換え」の対象となる漢字漢語は合わせて 341 組が提示されている。

以上,「書き換え」の問題は大正末期から昭和初期の頃に端を発し,戦後になってようや

くその実施が本格的に始まった歴史を振り返ってみた。この中で、「書き換え」の歩みを左右する二つのポイントがある。一つは、漢字制限の動きである。漢語整理は、まさに「常用漢字表」(1923)の公表によってスタートを切り、また「当用漢字表」(1946)の公表によって再出発したといえる。もう一つは、新聞放送業界の要望と実行力である。新聞放送業界では、文字表記に対する関心が高く、表記のゆれをなるべく整理して最小限に止めたい要望から、いまでも自主的に表記の改善を推し進めている。「書き換え」に関しては、新聞・放送用語集の類を見れば、普通の国語辞典よりも整理が進んでいるのが現状である。

2 「漢語整理案」とその方法

「漢語整理案の一」では、「常用漢字(1923)と仮名を用いて文章を書き綴り得るよう漢語を整理したもの」としている。その方法を整理すると次のようになる。

(1) 他の語に言い換えたもの

- a.別の漢語に言い換えたもの 安堵→安心 彙報→雑報 押捺→押印
- b.和語に言い換えたもの 齧歯→虫歯 咳嗽→せき 旺盛→さかん
- c.外来語に言い換えたもの 間諜→スパイ 汽罐→ボイラ
- d.語を句の形にしたもの 雁行→並んで行く 瞥見→ちょっと見る

(2) 同音の他の漢字に書き換えたもの

- a.共通部分を持つ同音の漢字に書き換えたもの 雑沓→雑踏 注文→注文
- b.その他の同音の漢字に書き換えたもの 鞏固→強固 尖端→先端

(3) 仮名書きにしたもの 曖昧→あいまい 軋轢→あつれつ

(4) 交ぜ書きにしたもの 金箔→金ぱく 殴打→おう打 排泄物→排せつ物

(5) 難しい語のため廃棄としたもの 淹留 鯨飲 後董 剋励 卑俚

この中で、(4)は(3)の一種として位置付けできる。(5)は7例だけ示されている。その後の実際をみると、漢語整理の方法として用いられてきたのは主に(1)(2)(3)である。

「言い換え」は、一漢語に対して、「緘黙→沈黙・無言・だまる」のように、幾通りの対応が考えられる。また、「仮名書き」は漢字を仮名に直すだけでよいので比較的単純である。これに対して、「書き換え」は、語形の変化、意味のずれ、中国語の同形語との対応などの問題点を抱え、検討に値する。

3 「書き換え」語の分類と特徴

3.1 書き換え語の抽出

表記(用字用語)辞書類は、種類が多いが、編集方法が多種多様で、書き換えの語数・範囲・方法も一定しない。本発表では、『NHK 新用字用語辞典』(日本放送協会, 1981, 日常語3万余語収録)を中心に、武部良明(1979, 1991)によって一部補足し、計657組の語

を得た。

武部良明氏はかつて、「書き換え」を「漢字を単位とする書き換え」（例えば、坐席→座席／智能→知能）と「漢語を単位とする書き換え」（例えば、杜絶→途絶／掩護→援護）の二種類に分けて論じたことがあったが、その理由については言及されていない。実際に書き換え語の語例をみれば、二字の書き換えは以下の数例だけで、圧倒的に多いのは、一字の書き換えである。

叡智→英知 畸型→奇形 伎倆→技量 嶮岨→險阻 蒐貨→集荷 蝕甚→食尽

詮衡→選考 蒼惶→倉皇 智慧→知恵 摸形→模型 料簡→了見

したがって、書き換えの実態を踏まえ、「書き換え」の現象を、語の単位ではなく、漢字から漢字への書き換えとして検討することにした。

3.2 書き換え語の分類

まず、書き換えの目的によって次の二種類に分けられる。

I. 表外字→表内字： 萎縮→委縮 掩護→援護

漢語整理案（1926）から初見。漢字の字種を減らすのが目的。

II. 表内字→表内字： 交附→交付 閼涉→干涉

法令用語改正要領（1954）から初見。異形同義語を減らすのが目的。

また、漢字の書き換えは任意的なものではなく、書き換えに関わる漢字 A と漢字 B の間に何らかのつながりが存在するはずである。ここに、漢字の三要素といわれる音・形・義との関連によって分類すると、次のような四つのパターンに類別できる。

パターン	字音	字形	字義
A	同音	字形類似	字義類似
B	同音	字形類似	—
C	同音	—	字義類似
D	同音	—	—

以上の2種類と4パターンを表1のように整理すると、書き換え語の分布がよくわかる。

表1 書き換え語の分類と語数

パターン	表外字→表内字		表内字→表内字		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合
A	134	30.7%	35	15.8%	169	25.7%
B	82	18.8%	23	10.4%	105	16%
C	112	25.7%	86	38.9%	198	30.1%
D	108	24.8%	77	34.8%	185	28.2%
合計	436(66.4%)		221(33.6%)		657(100%)	

3.3 書き換えの2種類について

表1でわかるように、「表外字→表内字」型の書き換えは全体の三分の二ほどを、「表内字→表内字」型の書き換えは三分の一を占めている。

「表外字→表内字」型の書き換えでは、二つの場合が考えられる。

a.書き換え前に二つの語形が共に存在する：既存語の利用。例 衣裳→衣裝

b.書き換え前に一つの語形だけが存在する：新語形の造出。例 気焰→気炎

一方、「表内字→表内字」型の書き換えは、書き換え前に必ず二つの語形が存在していた。

例 修交→修好 反覆→反復

「表外字→表内字」型の書き換えは、必ず A→B のように書き換えるのに対して、「表内字→表内字」型の書き換えは、A→B パターンがある他、表2のように、A←→B パターンも16組の漢字、延べ69組の語ほど見られる。

表2「表内字→表内字」型に見られる A←→B パターンの書き換え

A→B	B→A
原→源 根原→根源 語原→語源	源→原 病原→病原
称→賞 称美→賞美 嘆称→嘆賞	賞→称 推賞→推称 賞揚→称揚
盲→妄 盲執→妄執 盲信→妄信 盲動→妄動	妄→盲 妄從→盲從
状→情 実状→実情 国状→国情 状景→情景 状勢→情勢 政状→政情	情→状 情況→狀況 情態→状態
劇→激 劇情→激情 劇変→激変 劇烈→激烈 劇暑→激暑 劇職→激職 劇務→激務 劇論→激論 劇減→激減 劇臭→激臭 劇震→激震 激戦→激戦 劇痛→激痛	激→劇 激毒→劇毒 激物→劇物 激業→劇業

3.4 書き換えの4パターンについて

表1で示したように、ABCDの各パターンは、Bパターンがやや少ないのを除いて、だいたい2~3割を占め、書き換えの方法としていずれも欠かせないものと思われる。

(1) Aパターンの書き換え

中国語流に見れば、いわゆる(a)仮借字、または(b)異体字の関係を持つものが8割以上を占めている。(仮借字：意味に関係なく、同音を持つ他の漢字を借りて表す方法。異体字：規範の字体以外の字体。)

(a) 意嚮→意向 萎縮→委縮 誠告→戒告 稀少→希少 訣別→決別

才智→才知 銷夏→消暑 煽動→扇動 蒼惶→倉皇 摩滅→磨滅

(b) 愛慾→愛欲 闇夜→暗夜 廻送→回送 乾盃→乾杯 糺彈→糾彈

兇悪→凶悪 結托→結託 讚歌→賛歌 戦歿→戦没 注文→注文

(2) B パターンの書き換え

中国語流の仮借字からはずれたものだが、偏旁部首の省略や置き換えによって形成される、日本語独自の仮借字とでもいうべき関係となっている。中国人学習者にとって、次の(a)グループの語は、まだ仮借字の範囲でなんとかカバーできそうだが、度を過ぎると、(b)グループの語のように、誤字と見られてしまう。

- (a) 諳記→暗記 欧洲→欧州 計劃→計画 媾和→講和 雇傭→雇用
 修煉→修練 焦躁→焦燥 船艙→船倉 褪色→退色 謀叛→謀反
 (b) 臆説→憶説 蛔虫→回虫 間歇→間欠 蒸溜→蒸留 沈澱→沈殿
 媒妁→媒酌 庖丁→包丁 輔導→補導 保姆→保姆 彎曲→湾曲

(3) C パターンの書き換え

「同音+字義類似」がその条件となるが、ここでいう「字義類似」は、同じ訓または近い訓をもつ漢字同士のことをさす。少し細かく下位分類をすると、(a)「誦」と「唱」はともに「となえる」という訓を持っているので、「復誦→復唱」は「字義類似」の書き換えと考えられる。(b)「潰・つぶれる」と「壊・こわれる」のように、訓が少々ずれても「字義類似」の部類に収めた。(c)中国語でいう仮借字の関係にあるものだが、「字義類似」の条件に叶っても「字形類似」からはずれるので、Cパターンに入れた。

- (a) 衣裳→衣裝 鞏固→強固 狂躁→狂騷 劇滅→激滅 涸渴→枯渴
 蒐集→収集 醇朴→純朴 截断→切断 特輯→特集 聯合→連合
 (b) 敬虔→敬謙 国状→国情 惨酷→殘酷 洗滌→洗淨 擅断→專断
 相異→相違 綜合→總合 鳥瞰→鳥觀 復原→復元 濫用→乱用
 (c) 安佚→安逸 恩誼→恩義 火焰→火炎 奇蹟→奇跡 屈伏→屈服
 月蝕→月食 陞進→昇進 侵掠→侵略 疏通→疎通 邀擊→要擊

(4) D パターンの書き換え

共通点が同音だけなので、恣意性がかなり見られる。(a)のように、書き換えの結果、字面による語義の解釈にずれが生じる場合と、(b)のように、字義と語義の遊離が激しく、「当て字」に近い用字法になる場合とがある。

- (a) 慰藉→慰謝 叡知→英知 掩護→援護 徽章→記章 饒舌→冗舌
 衰頹→衰退 尖端→先端 杜絶→途絶 哺育→保育 抛棄→放棄
 (b) 活潑→活発 伎倆→技量 交叉→交差 扣除→控除 叢書→双書
 擡頭→台頭 断乎→断固 鄭重→丁重 年輩→年配 舞蹈→舞踏

4 書き換えの類推範囲

4.1 類推範囲のちがいは

漢字字種の減少や異形同義語の圧縮を主要目的とする「書き換え」にとって、漢字 A が

どんな場合でも漢字 B に書き換えることができれば、いわゆる類推範囲が最も広く、「書き換え」の効果が最大限に生かされるわけである。しかし、実際に調べてみると、類推範囲については、語と語の間でかなりのちがいがあることがわかった。

表3 「書き換え」語の類推範囲

類推語数	「書換」字数	字数合計	「書換」語数	語数合計
15 語	2	116 字 (30.3%)	30	395 語 (60.1%)
12 語	1		12	
10 語	1		10	
9 語	2		18	
8 語	1		8	
7 語	4		28	
6 語	7		42	
5 語	6		30	
4 語	10		40	
3 語	17		51	
2 語	63		126	
1 語	262	262 (69.7%)	262	262 (39.9%)
合計		376 字		657 語

表3では、同じ「漢字 A→漢字 B」による書き換えが成り立つ語群を類推語数と呼び、類推語数が2語以上ある場合と類推語数が1語だけの場合にグループ分けして見た。類推語数15～2語のものは、つまり類推範囲のあるもので、類推語数1語のものは類推範囲がないものである。表3によると、「書き換え」に関わった漢字は376字(組)ある中で、類推範囲のあるものは116字(組)で、「書き換え」漢字数の3割にとどまるのに対して、類推範囲のないものは262字(組)もあって、全体の7割を占めている。しかし、「書き換え」の延べ語数で見ると、両方は6割対4割で数字が逆転する。類推語数が10語以上のものは以下の4字である。

「附→付」、類推語数15語

附記→付記 附議→付議 附近→付近 附言→付言 附函→付函
 附則→付則 附属→付属 附帶→付帶 附着→付着 附表→附表
 附与→付与 寄附→寄付 給附→給付 交附→交付 送附→送付

「劇←→激」、類推語数15語(表2参照)

「智→知」、類推語数12語

智識→知識 智者→知者 智能→知能 智謀→知謀 人智→人知
 叡知→英知 才智→才知 衆智→衆知 智慧→知恵 智徳→知徳
 智育→知育 理智→理知

「聯→連」, 類推語数 10 語

聯関→連関 聯珠→連珠 聯想→連想 聯隊→連隊 聯邦→連邦
 聯盟→連盟 聯絡→連絡 聯立→連立 一聯→一連 聯連→関連

その他, 類推語数の多い順で, 「坐→座」(9 語), 「濫→乱」(9 語), 「慾→欲」(8 語), 「兇→凶」(7 語), 「蹟→跡」(7 語), 「讚→贊」(7 語), 「状⇄情」(7 語) などとなる。

4.2 類推範囲の決め手

類推範囲という視点から見れば, 「表外字→表内字」型書き換えと「表内字→表内字」型書き換えとの間にはかなりの差が認められる。

(1) 「表外字→表内字」型書き換えの場合

表内字に比べて, 表外字の造語力は限られているため, 書き換えの場合でも, もとより類推語数が少ないのが普通である。しかも, 表外字を無くすのは最大の目的なので, とくに常用語の範囲では, 書き換えの類推範囲がだいたい最大限に達成できる。

(2) 「表内字→表内字」型書き換えの場合

表内字は, 現代日本語において比較的強い造語力をもつ部類であり, 他の漢字との結合によって多くの漢語を生み出している。このパターンの書き換えでは, ほとんどの場合に, 類推できない例外が存在する。「奏効→奏功」を例にすると, 「効→功」の書き換えは, 「奏効→奏功」の場合のみに成り立つもので, 「効果・効用・失効・特効・有効」などになると, いずれも類推によって書き換えることができない。次の例も同じである。

輩→配 ○年輩→年配 輩下→配下 ×後輩・若輩・同輩・輩出…
 殖→植 ○殖民地→植民地 入殖→入植 ×殖産・生殖・繁殖・殖財…

さきに触れたように, 「表内字→表内字」型書き換えの目的は, 類義異形語を減らすことにあるので, もともと異形が存在しない語（例えば×印の諸語）に関しては, 書き換えの範囲内に取り入れる必要がないという考えであろう。

5 書き換え語の由来

書き換えを行われる前の語形を旧語形, その後の語形を新語形と呼んだりするが, 新語形の由来を調べてみれば, 必ずしも書き換えによって新しく作られた語とは限らず, 多くの語は, 書き換えの前にすでに存在していたことがわかる。書き換えによって, 新しくできた語形はどのくらいあるのか, この問題を解明する試みとして, 『大辞典』(平凡社, 1934~36)における書き換え語の収録状況について調べてみた。

5.1 『大辞典』による検証

『大辞典』を選んだのは, 収録語 70 万を超える史上最大の辞典であることと, ちょうど

「漢語整理案」(1926~28)の公表と、戦後「当用漢字表」(1946)の実施の間に出版されたことの二点による。この時期では、漢語整理の考えが出たものの、戦時中で実施に至らなかったもので、『大辞典』の収録語なら、まだ書き換えが行われる以前の状況を保っていると考えたからである。『大辞典』における書き換え語 657 組の収録状況は、次の五つのパターンに分類できる。

(1) 二項目で二語形 例 款待→歓待

カンタイ 款待 手厚く待遇すること。…

カンタイ 歓待 よろこんでもてなす。…

書き換えによって、二語形の意味を一語形に持たせることになり、語義の拡大が伴う場合も考えられる。

(2) 一項目で二語形 例 乾盃→乾杯

カンパイ 乾盃・乾杯 杯の酒を飲み乾すこと。…

書き換えによって、異体字・仮借字または繁・簡体字による重複を統一させる。

(3) 旧語形のみ収録 例 夥多→過多

カタ 夥多 非常におほいこと。… 過多 (未見)

『大辞典』が出版される当時、「夥多」の語形が主流で、一方の「過多」は書き換えによって生まれた新しい語形との可能性がある。

(4) 新語形のみ収録 例 格闘→格闘

格闘 (未見) カクトー 格闘 打ち合ひたたかふ。…

当時において、「格闘」の語形がないでもなかったが、「格闘」のほうが主流となっていたので、収録されたと思われる。

(5) 二語形共に未見 例 弘報→広報 煽情→煽情

『大辞典』の遺漏なのか、当時まだ現れていなかった新語なのかとの可能性がある。

(1) ~ (5) の分布状況を、表 4 によって示す。

表 4 『大辞典』(1934~36)における書き換え語の収録状況

	2項目 2語形	1項目 2語形	旧語形のみ	新語形のみ	2語形未見
表外字→表内字	53	142	171	50	20
表内字→表内字	55	49	37	67	13
合計 (計 657 組)	108 (16.4%)	191 (29.1%)	208 (31.7%)	117 (17.8%)	33 (5%)

5.2 旧語形と新語形のふりわけ

表 4 をみると、「2 項目 2 語形」と「1 項目 2 語形」の語数を合わせると、299 語となり、

書き換え全語数の半数弱（45.5%）を占めている。さきに検討したように、これらの語は書き換えが行われる以前にすでに二語形ともに存在していたと考えられる。例えば、

衣裳→衣装 恢復→回復 潰乱→壊乱 畸型→奇形 媾和→講和
 散佚→散逸 蒐集→収集 障碍→障害 頹廢→退廢 注文→注文
 拔萃→拔粹 叛旗→反旗 扮飾→粉飾 掠奪→略奪 落伍→落後

「旧語形のみ収録」の 208 語は、全語数の約三割（31.7%）を占めている。これらの語については、収録された旧語形に対応する新語形のほうにもっと注目する必要があるかもしれない。書き換えによって新語形に生まれ変わった可能性が強いからである。そうだとすれば、それぞれの新語形がいつ、どのようにできたかについて調べる必要が出てくるのである。例えば、

臆説→憶説 活澆→活発 間歇→間欠 気焰→気炎 詭弁→奇弁
 交叉→交差 雇傭→雇用 撒布→散布 饒舌→冗舌 切線→接線
 船艙→船倉 叢書→双書 停年→定年 腐爛→腐乱 編輯→編集
 膨脹→膨張 摸写→模写 輿論→世論 朗誦→朗唱

「新語形のみ収録」の 117 語は、全語数の 17.8%を占めている。『大辞典』出版の当時においても、新語形の優位がすでに確立している語群だと思われるが、書き換えで新語形に決定した理由について、例えば、表外字を表内字にするとか、一般に多用される語形であるとかの理由のほかに、またどんなことが考えられるのか、漢字の字義や漢語の古い出典との関連がないのかなど、もっと細かく検討する必要があるかもしれない。

意嚮→意向 穩和→温和 確乎→確固 企劃→企画 脅喝→恐喝
 結托→結託 状勢→情勢 伸暢→伸長 相異→相違 探險→探検
 淡泊→淡泊 適確→的確 破摧→破碎 妄從→盲從 諒承→了承

「二語形共に未見」の語は少なく、全語数の 5%ほどに過ぎない。遺漏なのか新語なのか調べる必要があるが、全体的には、そのほとんどが和製漢語である。

暗翳→暗影 豪球→剛球 修煉→修練 扣除→控除 広汎→広範
 衆智→衆知 政状→政情 全潰→全壊 発註→発注 非認→否認
 附議→付議 鋪装→舗装 盲動→妄動 勇途→雄途 俚謡→里謡

結論として、「二項目で二語形」「一項目で二語形」並びに「新語形のみ収録」の各グループの語の書き換えにあたって、主として既存の語形を利用して書き換えを行ったとみられるが、これに属する語は 416 組で、全語数の 63.3%を占めている。これに対して、書き換えによって新語形が生まれる可能性は、主として「旧語形のみ収録」と「二語形共に未見」の二種類の語に集中するように思われる。これに属する語は 241 組で、全語数の 36.7%を占めている。

6 書き換えと中国語語彙との関係

書き換え語の中にも、古典中国語の出典をもつものが多く含まれている。書き換えによってもとの語形が変化すると、中国語語彙との関係はどう変わるのか、これは中国での日本語教育にとって解決すべき問題の一つである。

6.1 書き換えと古典中国語の関係

古典中国語に典拠をもつかどうかで、書き換え語を分類すれば、次のような四つのグループに分けられる。出典有無の判断は『漢語大詞典』(羅竹風主編、1994)に拠った。

(1) 新旧語形共に出典がある 例 帰伏→帰服

書き換えは二つの中国製漢語の間で行われているので、中国人学習者にとって、両方とも受け入れやすいといえるかもしれない。

(2) 旧語形のみ出典がある 例 規準→基準

「規準」のほうは古い出典をもつが、「基準」には出典が見当たらず、和製の新漢語に属するものである。

(3) 新語形のみ出典がある 例 快潤→快活

「快活」は古い出典をもつ中国製漢語であるが、「快潤」は、「快活」の同音異形語として並存する和製漢語になる。

(4) 新旧語形共に出典がない 例 醜出→拋出

「醜出」も「拋出」も和製漢語で、中国人学習者に理解しにくいものである。

書き換え語の中で、(1)~(4)の占める割合を表5で示す。

表5 書き換え語と古典中国語の対応関係

	語数	%
(1) 新旧語形共に出典がある	197	30%
(2) 旧語形のみ出典がある	128	19.5%
(3) 新語形のみ出典がある	156	23.7%
(4) 新旧語形共に出典がない	176	26.8%
合計	657組	100%

書き換え語と古典中国語の関係をより明確に表すために、表5の内容を表6の形に変えて掲げておく。

表6 新旧語形別に見た古典中国語との一致度

	旧語形(書き換え前)	新語形(書き換え後)
漢籍に出典があるもの	(1)+(2)=325(49.5%)	(1)+(3)=353(53.7%)
漢籍に出典がないもの	(3)+(4)=332(50.5%)	(2)+(4)=304(46.3%)
合計	657(100%)	657(100%)

表6によると、例えば、「漢籍に出典があるもの」欄を見れば、書き換え後の語数 353 語

は、書き換え前の語数 325 語に比べて、減るどころか、わずかに増える結果となっている。つまり、書き換えによって、これらの語と中国語との距離が遠くなったことはないようである。

6.2 書き換えと現代中国語の関係

現代中国語の語彙と古典中国語の語彙との間にかなりの差があるのは事実である。そうすると、書き換え語と現代中国語の関係はどうなっているか、書き換え語を『現代漢語詞典』（商務印書館、1978）の収録語と照合した結果を、表 7 で示す。

表 7 新旧語形別に見た現代中国語との一致度

	旧語形（書き換え前）	新語形（書き換え後）
『現代漢語詞典』にあるもの	232(35.3%)	227(34.6%)
『現代漢語詞典』にないもの	425(64.7%)	430(65.4%)
合 計	657(100%)	657(100%)

表 7 でわかるように、『現代漢語詞典』にあるものについてみると、書き換え後の 227 語は、書き換え前の 232 語に比べて、語数がやや減っているが、減少の幅が小さいことから、書き換えは、これらの語と現代中国語との関係を大きく変化させたことはないといえよう。ただし、表 6 と表 7 の結果を比較してみれば、書き換え語の約半数が古典中国語に出典を求められるのに対して、現代中国語の場合となると、書き換え語との同形語が約 3 割 5 分に減っていることが明らかである。

6.3 書き換え語と日本語教育

さらに、表 5 の方法に倣って、書き換え語と『現代漢語詞典』（『現漢』と略す）との対応関係を、表 8 のように分類してみる。

表 8 書き換え語と現代中国語の対応関係

	語 数	%
(1) 新旧語形共に『現漢』にある	49	7.5%
(2) 旧語形のみ『現漢』にある	178	27.1%
(3) 新語形のみ『現漢』にある	177	26.9%
(4) 新旧語形共に『現漢』にない	253	38.5%
合 計	657 組	100%

表 8 でまとめた対応関係を中国の日本語教育現場で生かそうとすれば、次のようなことが考えられるかもしれない。

- (1) 新旧語形共に『現漢』にあるもの

両方とも現代中国語の語形と対応しているから、中国人学生にとって抵抗が少なくて覚えやすいであろう。例えば、

恢復→回復 稀少→希少 鳩合→糾合 鞏固→強固 紀律→規律
 燻製→薰製 劇烈→激烈 降服→降伏 亢奮→興奮 情況→狀況
 衰頹→衰退 切点→接点 辺疆→辺境 妨碍→妨害 盲動→妄動

(2) 旧語形のみ『現漢』にあるもの

中国人学生は書き換えによって生まれた新語形に違和感を覚えるだけでなく、中国語の語形との混同も起こり得る問題なので、とくにしっかりと教える必要がある。例えば、

衣裳→衣装 萎縮→委縮 臆説→憶説 蛔虫→回虫 間歇→間欠
 禁锢→禁固 驗算→檢算 交叉→交差 古稀→古希 装幀→装丁
 頹勢→退勢 断乎→断固 顛覆→転覆 標題→表題 腐蝕→腐食

(3) 新語形のみ『現漢』にあるもの

中国人学生にとって、新語形のほうが馴染みやすく、比較的簡単に覚えられる。例えば

安佚→安逸 穎才→英才 穩和→溫和 迴避→回避 氣慨→氣概
 饗応→供应 苦況→苦境 激毒→劇毒 月蝕→月食 抗元→抗原
 策戦→作戦 慘酷→残酷 刺戟→刺激 主腦→首腦 卒直→率直

(4) 新旧語形共に『現漢』にないもの

この種の語が最も多いが、中国人学生にとって馴染みがほとんどないので、和製漢語としてしっかりと教える必要があるであろう。例えば、

按分→案分 箇条→個条 貫禄→貫録 寄捨→喜捨 糺弾→糾弾
 供托→供託 漁撈→漁勞 繫争→係争 劇震→激震 死歿→死没
 受註→受注 剩員→冗員 定連→常連 惣菜→総菜 入殖→入植

参考文献

木枝増一 1929 『漢字漢語仮名遣整理案』 東洋図書。

武部良明 1979 『日本語の表記』 角川書店。

武部良明 1981 『日本語表記法の課題』 三省堂。

文化庁国語課 1982 『新編 現行の国語表記の基準』 株式会社ぎょうせい。

武部良明 1991 『文字表記と日本語教育』 凡人社。